



Title	トラウマの概念をアイヌの文脈に当てはめる : 比較と考察
Author(s)	ツァゲールニック, タッチャナ
Citation	アイヌ・先住民研究, 1, 35-51
Issue Date	2021-03-01
DOI	10.14943/97142
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/80885">http://hdl.handle.net/2115/80885</a>
Type	bulletin (article)
File Information	03_Placing the Concept.pdf



[Instructions for use](#)

# トラウマの概念をアイヌの文脈に当てはめる ——比較と考察——

ツアゲールニツク・タッチヤナ  
(北海道大学・大学院博士課程)

## 要 旨

世代間トラウマ、未解決の悲嘆、癒し、安全空間の概念は、北米の研究者の著作の中では、ポスト植民地時代の先住民社会の文脈の中で展開され、大いに議論されてきた。これらの概念は、先住民社会が直面し、植民地化の過程で影響を受け、彼らの社会的・経済的・政治的構造、世界観、生計、文化、そして彼らの存在に破壊的な影響を与えている、さまざまな精神的・社会的問題の説明と解決策を見出すことを意図して導入されたものである。

本論文は、上記のような概念を日本の先住民であるアイヌの文脈の中で議論するための試みであり、アイヌのトラウマ反応やそれに紐づく談話についての更なる考察を提案し、癒しと安全な空間の創造という枠組みの中で、アイヌ社会に特化した適切なアプローチ方法を開発することを提案するものである。2013年からアイヌのアイデンティティ研究に携わり、アイヌ関連のイベントや集会、文化的慣習に参加し、アイヌの配偶者としてアイヌの人々との交流を重ねてきた筆者の観察をもとに、このテーマに焦点を当てていきたい。

## 歴史的トラウマと先住民族の文脈

植民地化を背景に世代間に引き継がれるトラウマは、歴史的トラウマの概念の視点から広く議論されており、それは1990年代にMaria Yellow Horse Brave Heartとその共同研究者によってホロコースト研究から適用されたもので、彼らはこれを「魂の傷」とも称している (Duran et al.1998, 341)。Brave Heart と DeBruyn は、アメリカ先住民が直面した社会問題 (感情的苦痛、家庭内暴力、アルコール依存症、高自殺率など)の理解を深め、解決を求めるために「歴史的未解決の悲嘆と歴史的トラウマ」という概念を取り入れることを提案した (1998)。それは過去に言及して「現在」の意味を捉えることで社会的苦痛の原因を説明し、個々の先住民族の「スティグマを取り除く」ためでもあった (Kirmayer et al. 2014, 300)。歴史的トラウマは通常「抑鬱、薬物乱用、集団的トラウマへの被ばく、対人関係の喪失、未解決の悲嘆、その他の生涯にわたる問題や世代を超えた問題」を特徴とする (Brave Heart et al. 2011, 282)。

Brave Heartらは、歴史的トラウマを、特定の集団のアイデンティティや所属を共有する人々が負う

感情的・心理的外傷の、集合的で複合的な累積的外傷と定義し、それは共同体が何世代にもわたり生涯を通して経験する数々のトラウマの出来事によって引き起こされるものとした (Brave Heart et al. 2011, 283; Evans-Campbell 2008, 320)。

先住民族の文脈、正確にはネイティブ・アメリカン (アメリカ先住民) の文脈における歴史的トラウマの概念は、理論的にはホロコースト・サバイバーの研究に根差すもので、アメリカ先住民の共同体で見られる症状は、ホロコーストの生存者とその子供世代の人々によって述べられている症状と類似していることから、次の世代への影響があると考えられる。これには「サバイバー・症候群」(否定、焦燥感、不安、抑鬱、否定的自己暗示、悪夢、精神的麻痺、サバイバーズ・ギルト<sup>1</sup>などを特徴とする)、感情表現や攻撃抑制の困難さ、子孫世代に見られる自己批判傾向の強まりなどがある (Felsen 1998)。ホロコースト・サバイバーとその子孫について記録されたトラウマ反応は、Brave Heartとその共同研究者がラコタの研究で記録したものと類似しており、「歴史的トラウマ反応」と定義されている。これには過去の出来事や亡き先祖に対する永続的な熟考、サバイバーズ・ギルト、未解決の悲嘆、亡き先祖を救うことへの空想なども含まれている (Brave Heart et al. 2011)。

一方、北米先住民族とユダヤ民族との経験における数多くの相違点を指摘する研究者もおり、こうした違いはポスト植民地時代の先住民社会におけるトラウマの複雑さを理解する上で重要である。ポスト植民地時代の先住民社会では、喪失感とそれに関連するトラウマ反応は、一度限りの特定のトラウマ的出来事や期間に限り生じるものではない。アメリカ先住民の土地は植民地支配者に占拠され、しばしば退去を強いられたため、安全な場所に戻ることも移住することもできなかった。伝統的な生活手段、文化、宗教的基盤は著しく損なわれ、また完全に否定されることさえあった。文化的に健全な共同体が消滅したため、先住民族には植民地化後の復活し現実に適応する場も余地もなかった。民族浄化と同化政策には具体的な終了の時期 (例えばホロコーストの場合は戦争が終わった時) というものはなかった。伝統的な生き方、文化、言語を使用し続けることは違法とされ、植民地支配者の組織や社会はそれを認めなかった (Whitbeck et al. 2004; Kirmayer et al. 2014)。先住民の人々は今もなお喪失の記憶に日々直面することがよくある (例えば、土地の喪失、「言語の喪失、伝統的な宗教的慣習に関する喪失と混乱、伝統的な家族制度の喪失、伝統的な癒しの慣習の喪失」) (Whitbeck et al. 2004, 120-121)。Whitbeck (2004, 128) が指摘しているように、先住民族が経験してきた喪失は「歴史的」なものであり、植民地政策がもたらした結果が今なお解決されていないため、先住民社会に負の影響を及ぼし、トラウマ反応を引き起こす出来事が歴史を通して常に生じているのである (例えば、多くの先住民族の集団が歴史的に保有してきた土地が未だに返還されていない。また失われた言語や文化的損傷を必死で再生させ取り戻そうとしている先住民族も数多くいる)。こうした喪失感、差別、誤解、部外者からの無知など、今もなお存在し、継続している引き金によってエスカレートしていく。

---

1 生存者としての罪悪感のこと。

## 植民地トラウマを理解する

こうしたことから、「歴史的トラウマ」ではなく「植民地トラウマ」という表現を用いた方が、植民地政策によって引き起こされたトラウマの影響をより正確に理解できる、とする研究者もいる。それは（歴史的トラウマという言い方では）「過去の出来事という誤解釈を招きかねず」、「先住民族が被った世代間トラウマという現象が過小評価される恐れがある」ためであり、これらの研究者はトラウマの影響とそれに伴う苦悩は今なお継続している、と指摘する（Mitchell & Maracle 2005; Evans-Campbell 2008）。Evans-Campbell（2008）の説明によれば、植民地トラウマという用語は「現代のアメリカ先住民およびその居住領域を植民地として武力で支配した時代に、文化の破壊や集団虐殺が行われたことに関係する、過去と現代のトラウマ的事象全てを含めた表現として使われている」（Evans-Campbell 2008, 335）。Mitchellとその共著者らは、植民地トラウマについて「複雑で継続的な集合体として蓄積されるという特徴を持ち、世代間にトラウマが受け継がれていくことになる」と述べている（Mitchell et al. 2016, 83）。

植民地時代のトラウマは、トラウマとなる出来事を直接目撃していなくても、世代を超えて受け継がれる可能性がある。Whitbeck et al. (2004) は、2つのアメリカ先住民居留地の長老の協力を得て、先住民族に影響を与える様々な歴史上および現代の出来事に対する反応を調査し、歴史的喪失の尺度（喪失の範囲と規模を測る基準）（寄宿制学校や強制移住などの政策による土地、言語、文化、家族の絆の喪失感として表される）と、歴史的喪失に関連する症状スケールを作成した。また、4つの居留地から10～12歳の子供を持つ親143人を対象とした調査で得られたデータを分析したところ、回答者は不公正な条約による土地の喪失や寄宿学校への強制入学など、歴史的にトラウマになるような出来事を目撃していないにもかかわらず、それらの出来事に関するトラウマ的な物語を自らの感情の中に抱えて生きており、それが悲嘆、抑鬱、怒り、喪失に対して抱く不名誉、疎外感、白人に対する不快感、白人の意図に対する恐怖と不信感などの原因となっていた（Whitbeck et al. 2004, 125 表II）。

Evans-CampbellとWalters（2006）は、ポスト植民地主義の文脈の中で過去に起こり、世代を超えてトラウマ的影響を与えた出来事に対する歴史的トラウマ反応を、植民地化の結果と密接に結びつけた「過去と現代のトラウマ的反応が複合した反応」として特徴づけられる植民地トラウマ反応へと発展させた。歴史的トラウマと関連した現代のトラウマは、個人や集団が経験する差別的な出来事やマイクロアグレッション（自覚なき差別）といった形で生じる可能性がある（Evans-Campbell 2008, 332に言及）。

マイクロアグレッションは、現代のトラウマの中ではそれほど目立つものではないが、日常的に繰り返される差別的ストレスラーとしての役割を果たす。Walters（2003）による都市部のアメリカ

先住民にもたらされたトラウマの影響に関する研究では、調査対象としたアメリカ先住民の成人197名のうち78%が「見た目も行動もインディアンのようにではない」と言われた経験を持ち、66%が「驚くほど明瞭に話す」と言われたことがあり、33%が雇用主から外見を変えるよう求められたことがある、と報告した (Evans-Campbell 2008, 332に言及)。これらはいずれも、植民地政策の歴史と関連して、累積的な影響を及ぼす、日常的なマイクロアグレッションの例である。

植民地トラウマは、対人的な態度によって特徴づけられるだけでなく、多くの場合、今なお制度的なものとして残っている (Fast & Collin-Vézina 2010, 132)。植民地支配による文化の侵略は今も続き、時には目に見えないが、法律や政府ではそれを合法としている (Mitchell et al. 2016, 82)。

## 文化的トラウマの考察

一般的に、トラウマは身体的・精神的虐待や死と関連しており、喪失による悲嘆として明確に表現されている。喪失は物理的な喪失だけでなく、経済的・政治的・社会的・宗教的・文化的システムなどの価値観や有形物の排除を指すこともある。これらのシステムは、植民地支配者が先住民の土地に侵入するまで何世紀にも渡って、先住民社会の営みの基盤となってきたものである。

Stammとその共著者らは、文化的衝突モデルに言及しつつ、北米やアフリカ南部における欧州からの入植者（到来した文化）と先住民（元来の文化）との交わりが、「突然の文化的課題とそれに続く文化の喪失」を生じさせたと指摘した。それは時として言語や宗教的慣習などの禁止という形をとり、通常は「文化的記憶の喪失、経済的機会の減少、貧困、健康上の選択肢の縮小、家族の崩壊などを特徴とする」(Stamm et al. 2004, 91-93)。

到来した文化に晒されることは、元来の文化の持続可能な伝統的システムの著しい変化や破壊を招く可能性があるが、「傷付いた文化」が経済的・社会的資源の奪還を求めたなら、(理想的には主導権を持つ文化の支援と励ましを得て) 復活と再編成が起こるかもしれず、その結果として「元来の文化の構成員による二文化的または多文化的適応」が起こり得る (Stamm et al. 2004, 89)。

## アイヌの文脈における植民地トラウマという概念

トラウマと喪失の定義は文化によって異なり、それぞれの文化の歴史的経験と現代の経験に左右される (Stamm et al. 2004)。歴史的・世代間のトラウマについては、日本のアイヌ民族の文脈で論じた研究はほとんどなく、多くの場合、外国人研究者による英語で書かれた学究的著作の中で論じられている (Siddle 1996, Lewallen 2016)。

Evans-Campbell (2008) は歴史的トラウマに関連する出来事には次の3つの明確な特徴があるとしている。

- 1) 当該の出来事が生じた時、その共同体の多くの人々がそれを経験し、またはそれに影響されて

いる。

- 2) 当該の出来事が現代の共同体において著しい集団的苦痛と悲嘆を生じさせており、それが経験として記録されたり語り継がれたりしている。
- 3) 通常は外部者により「しばしば破壊的な確固たる意図を持って」実行された出来事である (Evans-Campbell 2008, 321)。

本論文では、こうした歴史的トラウマの特徴を借用し、また植民地化の経験に関連する現代の引き金の中で発現する植民地トラウマ反応という考え方を取り入れ、アイヌ民族が経験しているトラウマの概念に注意を向けることを提案する。

## 歴史的遺産

アイヌと和人の関係についての公的言説では、「植民地化」という表現を避け、それを「同化政策」という言葉で置き換える傾向が見られる。これらの用語が使用される場合でも、明治時代のはじめに北海道開拓と呼ばれる時代が開始されてからの時期に言及する文脈の中で用いられることが多い。これはアイヌの土地の急速な植民地化が開始された時期であり、それに続き日本本土から屯田兵と開拓者が大量に入植した。アイヌの人々は転居を命じられ、その土地と天然資源は収用され、文化的慣行も禁じられた。

「北海道土地売貸規則」と「地所規則」等によってアイヌが漁狩・伐木に利用した土地（生産の場）または居住していた土地（生活の場）は和人による分割私有の対象になったり、官有地に編入されたりした。また、生産活動の基盤であった狩猟や漁業をするための権利が奪われ、狩猟を行うために免許鑑札を取得し、または猟税を支払わなければならなくなった上、毒矢の使用が禁止され、鮭が遡上する河川等で漁業権も与えられなかった（榎森2007）。

こうした政策の仕上げとして旧土人保護法が制定され（1899年制定、1997年廃止）、この法の下で「旧土人」のための教育制度が旧土人学校という特殊な形で導入された。その目的はアイヌの人々を完全に日本国民に同化させることだった。旧土人学校の教育課程は限られた内容で質の低いものであり、先住民の習慣と言語を「後進的」と見なし、その使用を厳しく禁じた (Siddle 1997; Mason 2012)。

アイヌの人々にとってはトラウマとなり、和人にとっては気まずい過去となり、悲劇的な物理的破壊の歴史は語られず、概して公にされることはなかった。Lewallenは伝統的な手工芸を通じたアイヌ女性のアイデンティティ・エンパワメントをテーマとする研究の中で、こうした破壊をジェノサイド（集団虐殺）と表現する。江戸時代には、アイヌの男性が遠く離れた港で奴隷のように働かされた一方で、女性は和人の男性（支配人・番人・出稼和人）の「妻妾」化という「和人女性の蝦夷地進出がなされない段階での番人の長期定住化政策であった」と指摘される（海保1992、181）。



「アイヌ女性は強姦され、虐待され、誘拐され」(Lewallen 2016, 133)、「妻妾」の対象が未既婚者の区別が無く、出産適齢期の女性が多く、家庭崩壊をまねき、女性は自殺することもあった(海保1992)。結果的に被害を受けたアイヌ女性の健全な生殖機能に深刻な影響が及び、アイヌの家族の結束や伝統的な家族の絆が断ち切られた。さらには搾取的な労働、梅毒や天然痘などの病気の蔓延も重なり、アイヌの人口は激減した(Lewallen 2016; 海保1992)<sup>2</sup>。Legters (1992) はジェノサイドを定義する中で<sup>3</sup>、ホロコーストにおけるユダヤ人の大虐殺と同様の状況に、アメリカ先住民が晒されたことを実証しつつ、ジェノサイドとは「国民・民族・人種・宗教集団を全体または部分的に破壊する目的で遂行される」行為であり、それには「集団の構成員を殺害し、甚大な身体的・精神的損害を与え、集団全体またはその一部の物理的破壊をもたらすであろう生活条件を課し、集団の構成員の出産を妨害する措置を講じ、その集団の子供を別の集団に無理やり移す、という5通りの犯罪行為が含まれる。」とする(Legters 1992, 102)。

植民地支配のもう1つのトラウマの結末として、20世紀初頭から1977年にかけて、研究資料とするのを目的として、倫理に反するやり方でアイヌの墓地から祖先の遺骨が掘り出され(Nakamura 2019)、日本各地の大学や博物館の収納庫に収められた。埋葬と死者の扱いに関するアイヌの信念体系に反して、国の機関にアイヌの祖先の遺骨が保管されているという問題が明るみに出たのは、1980年代の初めである。それに続き緊迫した交渉と大学を相手取った訴訟が行われた。アイヌの年長者らや共感した支持者の尽力により、2016年から略奪物の多くが返還され再び埋葬されているが、アイヌの伝統に則りアイヌの地に戻されるべき祖先の遺骨の多くが、未だに返還されていない。

祖先の遺骨返還の問題についてはまだ議論されており、政策と合法性という点から詳細な分析がなされているが、これらは「語られている今も続く苦悩と根深い怒りの証拠」であり、「アイヌの家庭で次世代に受け継がれるトラウマの代表例」と語るアイヌ長老の証言に注意を向けつつ、彼らの感情を「トラウマ」の概念に組み入れた研究はわずかである(Dollin 2020, 114)。祖先の遺骨に関する長老のトラウマは、反倫理的なやり方で扱われており、それが「深い悲しみと強い怒り」を生じさせ、祖先に対する罪の意識を抱き続ける原因となっている(Hirata et al. 2020, 248)。

Brave HeartとDeBruyn (1998) はアメリカ先住民の置かれている状況に「権利を剥奪された悲嘆」という概念を取り入れ、「喪失が認識されない、または公の場で追悼されない」場合、「怒り、罪の意識、悲嘆、無力感」といった情動反応を引き起こす、とし、こうした悲嘆を解消し、感情を和らげるために行われるのが、その文化の中で道義的に容認されている葬礼の儀式である、と指摘する(pp. 66-67)。例えば、アイヌの長老である清水裕二氏は遺骨が返還されることになってから再埋葬の儀式を執り行うまでに悪夢を見、儀式が終わってからは悪夢を全く見なくなり、熟睡できるよう

2 例えば、イシカリ場所でのアイヌ民族の人口は1807年の2285人から、1817年に疱瘡の流行があり1822年の1685人に減り、1854年に726人までに激減した(海保1992, 189)

3 Legtersの集団虐殺の定義はBrave Heartの研究(1998)の中でも言及されている。

になったと述べている。「アイヌは土から生まれて循環して土に戻る。アイヌは一番望んでいること」、「ご先祖は喜んでいる」と語った<sup>4</sup>。

死とトラウマ、そして喪失との関連で論じることのできる、もう一つの歴史的事象の例が、不慣れな気候の地域への強制移住と病気の結果としての死である（1875年に樺太アイヌ841名の北海道への強制移住の事例など）。

## 現代のトラウマ

日本におけるアイヌ差別の問題は、アイヌの人々の書面および口頭の証言に基づき記録され議論されてきたが、差別の問題、特に差別に伴う情動反応に関しては十分な調査データがない。

日本におけるアイヌ差別の問題に関し現存する最新の官庁統計データは、北海道庁環境生活部総務課が実施したアイヌ生活実態調査報告書（2017）<sup>5</sup>である。「アイヌとしていやだと感じる点」についての設問に対し、回答者の29.6%（171名）がアイヌ差別の経験を挙げている。また「受けた差別に対してどのように対処しましたか」という設問に対しては「我慢した（泣き寝入りした）」、「相手に抗議した（暴力での対応を含む）」、「何も対処しなかった（出来なかった）」等といった回答があった（p.56）。

アイヌへの偏見やステレオタイプが存在しており、時には人種差別や社会的差別の形で表出されるため、アイヌの人々の多くが、アイヌの文化とアイデンティティに対して不安を抱き、自分が安全ではない環境に置かれていると認識するようになる。つまり差別的なステレオタイプ化政策と植民地化政策の影響を受けたマイノリティであることに気付くのである。著者のアイヌの協力者の1人は「自分でアイヌだということに別に構わないんだけど、差別されるのは嫌だ」<sup>6</sup>と述べている。証言者が語ったところによれば、第二次世界大戦時、アイヌの人々は人間としてさえ扱われず（「人であって人じゃない」）、ある和人の女性は息子が兵役を逃れられるように「アイヌを殺したら警察は（息子を）捕まえてくれるか」と思案したという。

アイヌの人々の多くが、アイヌとしての自身のアイデンティティをどう肯定的に捉えたらよいか思い悩み、多くの場合、自分のエスニック・アイデンティティを隠す方法を選ばざるを得なくなる。差別があるためアイヌを「だめな人たち」と否定的に捉えたり、親からアイヌのことについて教え

---

4 アイヌの経験：Jeffrey Gaymanによる和英通訳（2018年5月7日）。オーストラリア国立博物館 <https://www.nma.gov.au/audio/long-journey-home-repatriation-symposium/transcripts/ainu-experience-interpretation-by-jeffrey-gayman> [2020年11月14日閲覧]

5 北海道アイヌ生活実態調査報告書（2017）。北海道庁環境生活部総務課 [http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29\\_ainu\\_living\\_conditions\\_survey.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29_ainu_living_conditions_survey.pdf) [2020年10月28日閲覧]

6 2014年に行われたインタビューからの研究協力者の発言である。



ることは避けられたり「何もやらせず、とにかく知られないように」するのである。国のアカルチュレーション（異文化との接触による文化変容）と同化政策への順応を強いられた結果、アイヌ自身も「アイヌであること」を拒み、自ら進んで「日本人」を自称するようになっていった（Siddle 1996）。

当然ながら、アイヌの中には自身のエスニック・アイデンティティを肯定的に捉える人もいる（主としてアイヌ文化の保全継承活動に携わる人々）が、アイヌであることに不安を抱いた経験がなく、常にアイヌとしてのアイデンティティを肯定的に捉えてきた、という人は比較的少数である。アイヌの人々の大部分が、アイヌに生れたことを肯定的に捉えるまでに長い時間を要し、時にはそれに人生の大半を費やすことさえある。

実際に受けた差別に加え、差別的な態度の標的にされるのではないかと不安を抱いた経験を持つアイヌが数多くいる。例えば、学校の教科書にアイヌについての記述を見つけたとき、他のアイヌの子供がいじめられているのを見たとき、また職場など新たな社会環境に置かれた場合などである。アイヌの親には、自分の子供が差別的な態度に直面していることを認識し、幼稚園や学校などの教育の場に関する話題を敢えて避けようとする人もいる。

加えて、あからさまな差別的態度を日常的に経験することはないにしても、アイヌの人々の多くが、自らの民族的血筋に直接関係する、または「日本人に見えない」ことによるマイクロアグレッションに直面している。著者自身も、アイヌの友人が和人から英語で話しかけられたり、「日本語がお上手ですね」と褒められたり、和人の子供に「外人」と呼ばれたりもする場面に何度も居合わせている。こうした差別的発言は、意図的になされたのではなくとも、アイヌ民族が被った植民地支配という負の歴史に対するトラウマ反応の引き金となる。

著者のアイヌの協力者に、自身が大多数の集団と明確に異なる民族集団に属していることを、事前に両親から説明されていた人は誰もいなかった。北海道育ちのアイヌは、自分自身がイじめの対象になったことで、または他のアイヌの子供が差別されるのを見て、その事実に気づき、関東生まれまたは関東育ちのアイヌは、両親がアイヌの文化的活動に携わるのを見たり、自身も関わったりして、アイヌの血を引くことに気付いたと述べている。

## 植民地トラウマの影響レベル

Evans-Campbell (2008) によれば、歴史的／植民地トラウマの影響は、相互に関連する3つのレベルで考えると理解しやすい。すなわち「個人、家族、共同体」の3つである。

「個人レベル」では、トラウマ反応は不安、抑鬱といった精神的な問題、及びその他の健康に関連する問題の形で生じる。米国の専門家らは、北米の先住民集団に見られる、集中力低下、抑鬱、自殺率、アルコール依存症、家庭内暴力等の健康関連問題の解釈の仕方と解決策を見出そうとする中で、

歴史的トラウマの概念に注目し、それをアメリカ先住民の文脈に当てはめている。

日本におけるアイヌ関連の調査では、植民地支配／歴史的トラウマ反応の症状と見なされる健康問題については、未だに十分な配慮がなされていない。上村は、オーストラリアの先住民と日本のアイヌに関する比較研究の中で、アイヌの人々は自身の健康問題に大に関心を寄せているのに、アイヌの健康問題に対する日本の行政府の関心は低いと指摘する（上村 2017, 133）。北海道では、福祉対策と合わせて「健康をはじめとした生活上の各種相談に応じる」生活相談員制度が導入された。しかし上村は、こうした相談員制度を設ければ、アイヌの人々が直面している健康問題を十分に把握できるのか、と疑問を投げかける（2017, 142）。北海道庁環境生活部総務課アイヌ政策推進局アイヌ政策課が実施した「北海道アイヌ生活実態調査」には、健康状態に関する設問が欠けている事実注目する。その上で「不安に思っていること」を問う設問では、「自分と家族の健康」という回答が67.9%（2013年度報告書）と最も多かった点を指摘する（上村 2017, 143）。実際、2017年に公表された最新の報告を見ると<sup>7</sup>、「健康」に関する設問は、健康保険の加入者数（p.27）と、健康状態別世帯人数（p.20）に関しての一般的な設問のみである。回答者の間では依然として健康を懸念する人が多く、回答した291世帯の68.9%が健康を最大の懸念事項に挙げている（p.28）。上村は、北海道アイヌ民族生活実態調査という大規模調査の一環として実施された、北海道アイヌ協会の会員またはその関係者である北海道のアイヌ2903世帯を対象とした健康上のリスクファクターに関する調査に言及している。この調査では喫煙、飲酒量、賭博といったリスクファクターに着目し、アイヌの人々は、これら3つの要因すべてで平均的な北海道民よりもリスクが高いと結論付けている。この調査では、地域・収入・職業別の飲酒量、性別の喫煙頻度などについて詳しいデータを提供しているものの、その著者らの結論は、潜在的な歴史的原因による心理的トラウマの概念との関連性から導かれたものではない（品川&小野寺2010）。例えば、Siddle（1996）は19世紀後半に記述されたイザベラ・バードとジョン・バチラーの注釈に言及し、当時アルコール依存症が極めて明白な問題になっていたと説明する。江戸時代に北海道に駐在していた和人の番人らによってアイヌに日本酒が紹介され、酒は「アイヌ人に借金を負わせたり財産を奪い取る手段」として頻繁に利用されるようになった（p.67）。

「家族レベル」では、トラウマは育児のストレスとして表出され、その結果として家庭内のコミュニケーションが損なわれたりする。ホロコースト・サバイバーの第二世代を対象に実施された研究では、自尊心が低い、母親への帰属化を望まない、といったトラウマ反応が明らかになった。結果的に家族に対し健全な愛情を感じられなくなり、次世代の親としての務めを果たすことができなくなる。また、親を悲しませたくないと思い、ホロコーストについて親に聞くのを避けようとする傾

7 北海道アイヌ生活実態調査報告書（2017）. 北海道庁環境生活部総務課 [http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29\\_ainu\\_living\\_conditions\\_survey\\_.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29_ainu_living_conditions_survey_.pdf)  
[2020年10月28日閲覧]

向が子供世代に確認された (Fast & Collin-Vézina 2010, 129-130)。

アイヌの親は、アイヌとして生まれたことでトラウマを経験し、自らの民族性を否定的に捉えているために、または子供が差別されないよう守ろうとして、アイヌであることを秘密にしたり隠したりといった戦略を取ることが多い。親の側は家庭内でアイヌに関する話題を避けようとし、子供の側は親を怒らせないように、または困らせないように、アイヌに関する質問をしないようにする、といった話をよく耳にする。例えば、筆者の協力者の一人の証言によると、「お母さんは自分がアイヌだと隠して生きていた人だから、自分の身を守っていたね。私も同じように差別を受けないように、一生懸命ばれないように、育ててきたから」。防衛手段として、という前向きな意図からであったとしても、このようにして世代間の沈黙を強いられた場合、文化の継承が妨げられ、文化の喪失を加速させることになる (Nagata et al. 2019)。同じ経験を持つ、または同じコミュニティに属する親以外の大人で、説明し支えてくれるような人がいなければ、沈黙を強いられた出来事は、混乱と怒りを伴って心に突き刺さり、「パラノイア、不安、自尊心の低下」を招くことになる (Evans-Campbell 2008, 330)。

植民地トラウマは、健全な家族関係の崩壊を招く。アイヌの人々が「(子供のころ) 親が留守にしがちだった」、「親との関係が希薄だった」と成人になってから語ることがあるのも、そのせいかもしれない。但し、植民地トラウマが家族関係に及ぼす影響については、家族レベルにおけるこの問題の特徴と規模を理解するための、より慎重な研究が必要である。

共同体レベルでは、植民地トラウマに対する反応には、伝統文化と価値観の崩壊、伝統的な通過儀礼の喪失、アルコール依存症および身体疾患 (肥満症など) の罹患率の高さ、自殺率の高さ (Duran et al. 1998, Evans-Campbell 2008でも言及) といったことが含まれ、それらは共同体構成員の健康全般に負の影響を及ぼしている。植民地化の所産として、「社会の病理、社会構造の弱体化」といったトラウマ的反応が生じ、それが先住民社会を「衰弱した状況」に陥らせる結果を招いた (Evans-Campbell 2008, 328)。その中で不健全な物語が世代から世代へと語り継がれている。

植民地支配による持続的で体系的な侵略が、文化集団全体の抑圧、およびそれに関連する集団レベルでの社会的格差と医療格差の原因となっている (Mitchell et al. 2019, 82)。近年において、自殺率およびアイヌ人口への影響に関する医学研究や社会調査は実施されていないが、それはおそらく、こうした調査の複雑さ、またはアイヌ社会内外の問題に対する認識不足のいずれかによるものだろう。しかし、精神錯乱状態、不安定な経済状態、その他の理由による自殺や自殺未遂は、アイヌ社会では決して珍しくない、と打ち明けるアイヌもいる。ニール・ゴードン・マンローは、1930年代のアイヌ社会の状況について述べる中で、アイヌの自殺者が増えており、アイヌ社会が「アルコール依存症、極端な貧困、周囲からの中傷、精神病的鬱病、かつての社会秩序の崩壊、といった相互に関連する感情の複合体」に直面している、と指摘している (Siddle 1996, 67にて引用)。またSiddleは、アイヌ人の免疫力の欠如、「飲酒、食生活の変化、不衛生な習慣、貧困」のために結核罹患率と小児

死亡率が高い、といったことを示す道庁による医学調査記録に言及している（1996, 73）。

アイヌの場合、トラウマは時間の経過と共に重層化し、世代間に受け継がれ、現在のトラウマ体験（差別、人種差別、ステレオタイプ化）に積み重ねられていく。アイヌの人々は、たとえ個人レベルや家族レベルではトラウマ反応を経験していなくても、トラウマを抱えた社会背景の中で生活しているとも考えられる。

## 植民地トラウマのサイレンシング（強制的な沈黙化）

上記のような植民地トラウマに関する家庭内の沈黙は、親の側からすると、子供が差別とその結果としての苦痛を被らないよう守るための防衛策であり、見方を変えれば、こうした沈黙が家族とコミュニティの記憶が語られないことの一因となっている。こうした沈黙（サイレンシング）について熟考することは、個人や社会を苦しめている現在の逆境を理解するのに不可欠である。

Lewallen（2016）は植民主義の歴史とその継続的なレガシーによって沈黙を強いられてきたアイヌ女性の世代間トラウマの存在に着目する。アイヌの女性は、強制連行、同化政策、性暴力、土地や水路の喪失、人種差別、活力を減退させる貧困、といったレガシーに耐え続け、自らに影響を与えた「十分に表出できない、または先延ばしにされてきた悲嘆」を表現するための言語や概念的枠組みを持っていないと指摘する。

アイヌは両側から圧力を受けている。一方では、植民地化の歴史に関する支配的な社会や国家の物語や言説によって沈黙を強いられ、他方では、新たな文化的・社会的環境に順応し生き延びる方法を見つけようと沈黙してきた。言説におけるサイレンシングは、その狙いとする対象者、彼らの知識、そして彼らがそこから生み出す意味、つまり植民地化の経験や苦悩についての先住民族の語りに対する「力の行為」を伴う。サイレンシングという行為は、「話さないことを選択する、別の形で話すことを選択する、言説を置き換える」（Thiesmeyer 2003, 12）といった反応を引き起こす可能性がある。サイレンシングは同化的な機能を持ち、不要な語りをフィルタにかけ、それを別のもので代用しようとする。1899年から、アイヌ文化振興法が採択される1997年までの約1世紀にわたり、アイヌは「旧土人」として歴史上の支配的な言説から抹消された存在として扱われてきたが、現在ではそれに代わって新たに「共生」という肯定的な言説がなされるようになり、アイヌの豊かな文化と自然との特有の関係に敬意を払い、感謝することの重要性が強調されるようになった。しかしこの言説の中では、アイヌの土地の植民地化に伴う喪失やトラウマについての議論の余地はなく、それどころか不快な歴史について語らせないようにしている（Tsagel'nik 2020）。

アイヌ生活実態調査報告書（2017）の「差別の原因・背景は何だと思えますか」という設問に対する回答は、アイヌの人々が経験してきた歴史と、現在直面している問題に対する支配的社会的無理解および無知さえも存在していることの証拠となるデータを提供している。アイヌの人々に対する

る差別的態度の主な原因因子として、回答者244名中46.3%が「アイヌ民族の歴史的・社会的背景に対する無理解」を挙げ、59.4%が「人種的偏見」、25.4%が「経済的理由」、25%が「学校教育においてアイヌ民族の理解を深める取組が不十分なこと」と回答し、「アイヌ文化に対する無理解」と答えたのは23%だった (p.56)。

不運な、あるいはトラウマ的な歴史や経験を語らせないことは、共同体内部の無知と世代間コミュニケーションの中断という結果を招く。分断された世代間の関係を強化し、物語を共有し、沈黙を破ることは、健全な語りがなされる健全なコミュニティの再生に役立つ。Maxwell (2014) は、イヌイトの長老と治療センター長の言葉を引用する。このセンター長は植民地化を経験した歴史についての無知が現在のトラウマの解決を妨げているとし、次のように述べている。「人は自分に何が起きたかを理解すること (...)、その情報を得ることで心を動かされ、力を与えられ、『なるほど！今のよう状況になったのは当然のことだ』と納得するである」(2014, 418)。

## 癒しとレジリエンス（自己回復対応）

当然ながら、自らのエスニック・アイデンティティを肯定的に捉えているアイヌもいる。彼らは植民地支配の歴史、およびその現代における結果に伴う逆境に対処することができてきた（これは主としてアイヌ文化の保全継承活動に携わる人々である）。おそらくアイヌは、トラウマの概念やトラウマからの回復を意識することなく、コミュニティでの癒し、文化や祖先とのつながり、安全な空間の創造を求めてきたのではないだろうか。例えばLewallen (2016) がその著書の中で指摘しているように、アイヌ女性にとって、伝統的な手工芸は、「アイヌの民族精神を再発見し、これに関わるための極めて重要な慣習」であり、癒しの効果を持つ (2016, 141)。アイヌの踊りや歌の練習などによって安全な空間を作り出すことは、アイヌ文化と再びつながる手段となり、世代を超えた文化の継承の場となり、共通の価値観や経験を共有する場となる。アイヌの女性の中には、アイヌの衣装を着ると「一番綺麗だと言われてくれる」、「足りない部分をおぎなってもらう」、「血が騒ぐ」<sup>8</sup>などの感想を述べる人もいる。

アイヌが創り出す安全な場所が自然に生じることを、フランスの社会学者アンリ・ルフェーヴル (1991 [1974]) の考え方を借用して説明するなら、社会的空間は経済的・政治的・技術的な関係および領域から生まれる。先住民のアイデンティティにとって安全な空間とは、ある時代の特定の条件下における先住民族のニーズから生まれた空間でもある。すなわち植民地支配の抑圧的な状況下では「植民地支配者が所有し管理する『場所』の中に、わずかな『空間』を確保すること以外の選択肢」はないのである (Dudgeon & Fielder 2006, 399)。こうした安全な空間を作り出す必要性を感じるのは、

8 アイヌの協力者とのインタビュー。



動作主体である先住民自身である。それは当初の動機も目標もなく自然発生的に生じた感情かもしれないが、そうであっても、彼らが他者の存在に気付いたとき、そして自分たちの文化・経済・政治・社会の境界線が侵犯されたとき、その必要性を感じるのである（Low 2009, 28）。

安全な空間を創り出し、それを管理することは、植民地トラウマからの癒しの過程の一部であり、それは植民地化によって壊された先住民の知識、社会制度、社会制度上の人間関係、宗教的慣習を取り戻し適用することにつながる（Maxwell 413, 2014）。したがって、文化的に健全な社会を再構築するために伝統文化の知識と世代間コミュニケーションを取り入れたレジリエンス、つまり「逆境にもかかわらず積極的な適応」（Kirmayer et al. 2011）が求められる。

歴史的トラウマと植民地トラウマに関する教育は、植民地化とそれに伴う政策（所有権奪取、強制移転、集団虐殺、同化、アカルチュレーション）を押し付けられた先住民の個人やコミュニティに与えた影響に気付かせ、それを受け入れさせることにつながる。トラウマ的な経験と肯定的な経験の両方を共有し、文化的・精神的背景に自らを置くことは、沈黙と無知の壁を壊すことで感情を和らげ、世代間や家庭内の愛情、コミュニティへの愛着を復活させるのに役立つ、先住民としての自己のアイデンティティを、肯定的意味を持つものとして捉え直すのを促すことになる（Brave Heart 2000<sup>9</sup>）。

先住民社会の生活の質を高めるための成功モデルと考えられてきた、もう一つのレジリエンスの形が、セルフガバナンス（自己統治）でもある（Chandler & Lalonde 1998）。

## 今後の考察

歴史的トラウマという概念をポスト植民地時代の先住民族の文脈に導入した先駆者である識者や専門家、およびその追従者は、抑圧の歴史とそれに関連した社会的・文化的衰退および心の健康障害が、世界中のすべての先住民族に見出され、関係していると、確信を持って述べている。世界中の先住民族が、心身の疾患、混乱、文化的喪失、疎外、アイデンティティの崩壊に関連した社会問題に苦しんでいる（Brave Heart & DeBruyn 1998; Mitchell 2019）。

日本国政府から植民地政策を押し付けられたアイヌも例外ではない。彼らは今なお人種的ステレオタイプと文化的偏見に晒され、その文化は崩壊し、コミュニティは傷付いたままの状態である。アイヌの人々の喪失に対するトラウマ反応は、歴史的／植民地トラウマの枠組みの中に広く収められているとは言えず、その文脈や規模についての説明も評価もなされていない。それにも関わらず、

9 ラコタのサービス提供者およびコミュニティの主導者である男女45名が、歴史的トラウマの記憶を辿り、ラコタの伝統文化と儀式的融合に伴うトラウマ的経験を言葉で表現する機会を与えられた。その結果、回答者全員（100%）が、この介入が歴史的トラウマと未解決の悲嘆を解消するのに役立ったと答えた。このグループ全体でトラウマ関連の影響（悲しみ、悲嘆、怒り、絶望、羞恥心、無力感、罪悪感）が50～100%減少し、喜びや誇りといった肯定的な影響が50%以上増加した（Brave Heart 2000, 12）。



アイヌの人々の悲嘆は、口述され記述された彼らの証言によって明確に表現され、後世に伝えられている。安全な空間の創出、文化的／宗教的慣習の復活、自決と先住民族の権利の奪還、過去に関する教育の推進は、アイヌ社会の再生を促すだけでなく、日本社会全体の和解のプロセスにも寄与することになろう。

歴史的・植民地時代のトラウマとその影響をさらに探求することは、慎重な対処と文化的に適切なアプローチが必要とされるデリケートな問題であり、それは先住民社会の構成員によって、あるいは彼らの承認と指示のもとでのみ計画し、発展させていくことが可能である。

## 参考文献

- Ainu Experience: Interpretation by Jeffrey Gayman. (2018, May 7). National Museum of Australia. <https://www.nma.gov.au/audio/long-journey-home-repatriation-symposium/transcripts/ainu-experience-interpretation-by-jeffrey-gayman> [Accessed on November 14, 2020].
- Brave Heart, M.Y.H. (2000). Wakiksuyapi: Carrying the historical trauma of the Lakota. *Tulane Studies in Social Welfare*, 21-22, 245-266.
- Brave Heart, Y. H. M. & DeBruyn, L. (1998). The American Indian Holocaust: Healing historical unresolved grief. *American Indian and Alaska Native Mental Health Research*, 8, 56-78.
- Brave Heart, M., Chase, J., Elkins, J., & Altschul, D.B. (2011). Historical trauma among Indigenous peoples of the Americas: Concepts, research, and clinical considerations. *Journal of Psychoactive Drugs*, 43, 282-290.
- Chandler, M. & Lalonde, C. (1998). Cultural continuity as a hedge against suicide in Canada's First Nations. *Transcultural Psychiatry*, 35, 191-219. Retrieved from [http://reviewboard.ca/upload/project\\_document/Chandler\\_and\\_Lalonde\\_1998\\_Paper\\_\\_1265041839.PDF](http://reviewboard.ca/upload/project_document/Chandler_and_Lalonde_1998_Paper__1265041839.PDF)
- Dollin, A. (2020). Indigenous Peoples' use of media as a form of self-representation: analysis of Japanese government and Ainu discourses relating to the issue of Ainu ancestral remains repatriation. In *Identity and Cultural Icons in a Multicultural World: Ethnicity, language, nation* (pp. 103-123). Internal Joint Research Project of the Division of Multicultural and Pluralism Education, Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University.
- Dudgeon P. & Fielder J. (2006). Third spaces within tertiary places: indigenous Australian studies. *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 16(5), 396-409.
- Duran, E., Duran, B., Brave Heart, M. Y. H. & Yellow Horse-Davis, S. (1998). Healing the American Indian soul wound. In Y. Danieli (Ed.), *International handbook of multigenerational legacies of trauma* (pp. 341-354). New York: Plenum.

榎森 進 (2008). アイヌ民族の歴史 草風館.

Evans-Campbell, T. (2008). Historical trauma in American Indian/Native Alaska communities: A multilevel framework for exploring impacts on individuals, families, and communities. *Journal of Interpersonal Violence*, 23, 316-338.

Fast E. & Collin-Vézina D. (2010). Historical trauma, race-based trauma and resilience of Indigenous peoples: A literature review. *First Peoples Child & Family Review*, 5(1), 126-136.

Felsen, I. (1998). Transgenerational transmission of effects of the Holocaust. In Y. Danieli (Ed.), *International handbook of multigenerational legacies of trauma* (pp. 43-68). New York: Plenum.

Hirata, T., Ogawa, R., Shimizu, Y., Kuzuno, T., Gayman, J. (2020). Paradoxes and Prospects of Repatriation to the Ainu: Historical Background, Contemporary Struggles, and Visions for the Future. In Fforde C. et al. (Ed), *The Routledge Companion to Indigenous Repatriation: Return, Reconcile, Renew* (pp. 200-220). Routledge.

海保 洋子 (1992) . 近代北方史：アイヌ民族と女性と 三一書房.

Kirmayer, L.D., Dandeneau, S., Marshall, E. Phillips, M.K. &Williamson, K.J. (2011). Rethinking Resilience From Indigenous Perspectives. *La Revue canadienne de psychiatrie*, 56 (2), 84-91.

Kirmayer, L.J., Gone, J.P. & Moses, J. (2014). Rethinking Historical Trauma. *Transcultural Psychiatry*, 51(3), 299-319.

Lefebvre, H. (1991 [1974]). *The Production of Space*. Wiley.

Legters, L.H. (1992). The American Genocide. In F. J. Lyden & L. H. Legters (Ed.), *Native Americans and Public Policy* (pp. 101-112). University of Pittsburgh Press.

Iwawaki, Ann-Elise. (2016). *The Fabric of Indigeneity. Ainu Identity, Gender, and Settler Colonialism in Japan*. University of New Mexico Press.

Low, S.M. (2009). Towards an anthropological theory of space and place. *Semiotica*, 175-1/4, 21-37.

Mason, M. (2012). *Dominant Narratives of Colonial Hokkaido and Imperial Japan: Envisioning the Periphery and the Modern Nation-State*. Palgrave Macmillan.

Mitchell, T., Arseneau C. & Thomas D. (2019). Colonial trauma: complex, continuous, collective, cumulative and compounding effects on the health of Indigenous peoples in Canada and beyond. *International Journal of Indigenous Health*, 14, 74-94.

Mitchell, T. L. & Maracle, D.T. (2005). Healing the generations: Post-traumatic stress and the health status of Aboriginal populations in Canada. *Journal of Aboriginal Health*, 2, 14-24.

Nagata D.K., Kim, J.H.J. & Wu, K. (2019). The Japanese American Wartime Incarceration: Examining the Scope of Racial Trauma. *American Psychologist*, 74(1), 36-48. Retrieved from <https://psycnet>.

- apa.org/fulltext/2019-01033-004.html
- Nakamura, N. (2019) Redressing injustice of the past: the repatriation of Ainu human remains. *Japan Forum*, 31, 358-377. URL: <https://www.tandfonline-com.ezoris.lib.hokudai.ac.jp/doi/full/10.1080/09555803.2018.1441168>. (参照2020年11月14日) .
- 北海道庁アイヌ政策推進室 (2017). 北海道アイヌ生活実態調査報告書 [http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29\\_ainu\\_living\\_conditions\\_survey\\_.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29_ainu_living_conditions_survey_.pdf) (参照2020年10月28日) .
- 品川ひろみ、小野寺理佳. (2010) .「健康のリスク要因とその現状」小内透 (編)『現在アイヌの生活と意識—2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書, アイヌ先住民研究センター , 73-88.
- Siddle, R. (1996). *Race, Resistance and the Ainu of Japan*. Routledge.
- Stamm B.H., Stamm H.E., Hudnall A.C. & Higson-Smith C. (2004). Considering a theory of cultural trauma and loss. *Journal of Trauma and Loss*, 9, 89-111.
- Thiesmeyer, Lynn. "Introduction: Silencing in discourse". *Discourse and Silencing: Representation and the Language of Displacement (Discourse Approaches to Politics, Society and Culture, 5)*, edited by Lynn Janet Thiesmeyer, John Benjamins Pub Co., 2003, pp. 1-33.
- Tsagel'nik, T. (2020). Discourse of Silencing in the Context of the 150th Anniversary of the Naming of Hokkaido: Representation of Ainu-Wajin Relations in the Television Drama "Eternal Nispa, the Man Who Named Hokkaido, Matsuura Takeshiro". *In Identity and Cultural Icons in a Multicultural World: Ethnicity, language, nation* (pp. 125-143). Internal Joint Research Project of the Division of Multicultural and Pluralism Education, Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University.
- 上村英明 (2017) .「健康の社会的決定要因」からアイヌ民族差別を考える—先住民族の健康問題に関する日豪比較研究に向けて—『*恵泉女学園大学紀要*』, Vol. 29, pp. 133-146. <https://core.ac.uk/download/pdf/236345599.pdf>.
- Whitbeck, L., Adams, G., Hoyt, D. & Chen, X. (2004). Conceptualizing and measuring historical trauma among American Indian People. *American Journal of Community Psychology*, 33, 119-130.

# Placing the Concept of Trauma into the Ainu Context: Parallels and Discussions

Tatsiana Tsagelnik  
(Hokkaido University, PhD student)

## ABSTRACT

This paper is an attempt to broach the concepts of colonial/historical trauma, unresolved grief, healing, and safe spaces for discussion in the context of Ainu, the Indigenous people of Japan. It suggests consideration for further attention on traumatic responses and narratives among Ainu, and the development of appropriate and specific ways of approaching those responses through a framework of healing and the creation of safe spaces for Ainu society. Though the concept of trauma has been largely discussed in the context of post-colonial Indigenous societies, especially in the works of North American researchers, this literature is mostly unavailable for Japanese language speakers due to a deficiency in discussions on this topic in Japan.

Awareness of intergenerational trauma caused by the consequences of colonial policy may suggest explanations of the situation Ainu are facing as individuals and as a community, encourage reconsideration from a different angle of colonial historical legacy, and may contribute to reconciliation within Ainu society and with the ethnic Japanese majority by breaking the silence revolving around colonial and post-colonial narratives.

